

～ ある日の鬼瓦物産(ファンシー雑貨販売業)その7～

『あきらめなければ、ゲームは終わらない。』

- 美樹 | ねえ…、私たちこの先どうなるの？
- 鬼瓦社長 | さあな、俺にもわからん。行けるところまで行ってみるだけだ。
- 美樹 | 何それ！そんなんじゃ困るの！私がいつまでも黙って付いて行くと思ってるの？
- 鬼瓦社長 | お前に「付いてきてくれ」と頼んだ事は無い。お前の方から俺の所へやってきたんだ。
- 美樹 | ズルイひと……。世の中そんなに甘くないわよ。
- 鬼瓦社長 | 結構。俺は昔から難しければ難しい程ファイトが湧いてくる性質(たち)なんだ。
- 美樹 | 普通の女の子なら「カッコイイ」とか言うんでしょけど、私は違うわよ。そんな夢みたいな事、いつまで言ってるの？
- 鬼瓦社長 | 何と言われようと構わない。それに俺には強い味方が2人もいる。お前とアイツだ。
- 美樹 | アイツって誰？ え～？ もしかして、くさたべ君？
言っておくけど私とくさたべ君、何にもないわよ。
- 鬼瓦社長 | 知ってる。まだキスもしてないって、くさたべが言っとった。
- 美樹 | キスどころか、手も握ってくれないわ。。。そうじゃなくて……。
- 鬼瓦社長 | まあ、聞け。アイツはもしかしたら、とんでもない大物かもしれんぞ。
- 美樹 | そんな事言って、私をくさたべ君に押しつけようとしてるんでしょ。
- 鬼瓦社長 | アイツはウチに入るまでに928社面接受けて、みんな落ちたんだ。
- 美樹 | 知ってるわ。よく採用したわよね。落ちた理由はまあ、察しがつくけどネ。
- 鬼瓦社長 | 考えてみる。ウチを含め929社も受けたんだぞ。よく落ちたもんだ。
でもな。「よく、あきらめなかった」と思わないか。
- 美樹 | それは……。
- 鬼瓦社長 | 面接の時に尋いたんだ。そしたらアイツは、「田舎の両親が自分の就職が決まるの心待ちにしてるんで、決まるまで就活続けます。」と言ったんだよ。
- 美樹 | ……。
- 鬼瓦社長 | それが3年前だ。覚えているか。大口の焦げつきが出て、ニッチもさっちもいなくなつて幹部の従業員までが、辞めていった頃だ。その時、俺はアイツに教わったんだ。
「あきらめなければ、ゲームは終わらない。あきらめなければ、想いは必ず届く。」
営業があきらめたって会社は潰れない。でも、社長と経理があきらめたら、すぐ倒産だ。だから俺はアイツを経理に置いたんだ。
- 美樹 | 今も、あの夢、あきらめてないの？
- 鬼瓦社長 | ああ。俺にはそれしかないからな。それを叶える事が自分の周りの人を幸せにできる唯一の方法だと信じてる。
- 美樹 | わかったわ。そこまで言い切るならいいわ。言ってあげる。
「カッコイイ。世界で一番好きよ。」